第4講

人文科学系(4)

非認知能力

チャプター1

資料読解

生徒メモ欄

1　「わんぱくでもいい，たくましく育ってほしい」

2　1970年代のCMで流れていたフレーズです。いまから約40年前でさえこんなフレーズが特別な意味を持っていたのですね。

3　あえて言い換えてみるなら……。

①「わんぱくでもいい」=「頭でっかちでなくてもいい」

②「たくましく育ってほしい」=「しっかりと生きていく力を身に付けてほしい」

……といったところでしょうか？

4　この頃から，すでに②のような力を子どもたちに望む流れがあったことがうかがえます。しかし，この「たくましさ」といった②のような力は難しくもあります。何をもって「たくましさ」というのか？　(身体的な)健康のこと？　(精神的な)自立のこと？　人によってイメージする「たくましさ」はきっと違ってくるのではないでしょうか。

5　イメージが人によって違ってくれば，当然この力をどうやって育てることができたのかもわかりにくくなります。つまり，この力を「点数」にすることの難しさです。ただでさえイメージが違うのに，点数にするための「ものさし」となるともっとバラバラになってしまいますよね。例えば，「漢字をどれだけ知っているか？」とか「2桁同士のかけ算をミスなく何回解けるか?」とか……こうした語彙力(国語)や計算力(算数)であれば，イメージやものさしがはっきりしているので，いま，どれぐらいの力が身に付いているのかをわかりやすく点数にできます。先ほどの力とはずいぶんと違ってくるわけです。

6　さて，このようにイメージやものさしに違いが出やすく，点数にできにくい力のことが「非認知能力」と呼ばれるようになりました。そして，もう一方のイメージやものさしに違いが出にくく，点数にできやすい力のことを「認知能力」と呼ぶようになりました。(中略)

7　「非認知能力」は，点数に出して測定することが難しい力であるため，『測りにくい力』とします。逆に「認知能力」は，点数に出して測定することが容易な力であるため，『測りやすい力』としましょう。このように言い換えると，表1の通りに整理することができます。

8　それでは，この測りにくい力にはどのような力があるのでしょうか？　これまで言われてきた力の代表的な例を紹介しておきます。

○コミュニケーション力(他者とやりとりできる力)
○思いやり・共感性(他者の立場や思いに立てる力)
○忍耐力(がまんする力)
○自信・自尊感情(自分をプラスにとらえる力)
○意欲(前向きにがんばろうとする力)　…などなど

【表1：測りにくい力と測りやすい力】

測りにくい力	非認知能力	点数(数値)化して 測定することが困難な力
測りやすい力	認知能力	点数(数値)化して 測定することが容易な力

9　このように測りにくい力には，ほかの人と自分との関係の中で必要とされる力や，さらには地域社会との関係の中で必要とされる力，そして，自分自身の内側(感情や意欲，物事のとらえ方や自信など)から自らを高めようとする力などが挙げられます。他人も社会も自分自身も常に変わり続けるために，これらとの間で求められる力も変わり続けなければなりません。だからこそ，決まった(固定化した)イメージとものさしで測ることが難しいわけです。ちなみに，こうした力のことを専門家の中には「社会情動的スキル(能力)」と呼ぶ人もいます。

10　また，測りにくい力のことを「新しい能力」と呼ぶ人もいます。21世紀という時代だからこそ求められる力……というメッセージが伝わってきますが，先ほどのCMにもあったように，実は21世紀になったから新しく求められ始めたわ

生徒メモ欄

生徒メモ欄

けではありません。そのため，ここでは「新しい」と呼ばずに，もっとシンプルに「測りにくい」と呼びました。

11　しかし，どうして「新しい能力」と呼ばれているのか，その理由について私たちは知っておくことも必要でしょう。ともすれば，これからの時代の大きな変化とも関係してくると考えられます。

［中略］

12　「非認知能力」を世界で初めて提唱したのは，2000年にノーベル経済学賞を受賞したジェームズ・J・ヘックマン（シカゴ大学・経済学者）です。彼は，アメリカのミシガン州にあるペリー幼稚園で実施されていた就学前プログラムの研究を行っていました。このプログラム自体は，アメリカの心理学者ワイカートらによって経済的な貧困層に該当する幼児を対象に実施されていたのですが，ヘックマンはこのプログラムを提供された子どもとそうでない子どもとを成人（実際には40歳）まで追いかけて，収入や学歴，さらには犯罪率まで調査をしました。

13　すると，両者を比較した結果から，プログラムを受けた子どもの方が年収や学歴は高く，犯罪率は低いことがわかったのです。ヘックマンは，この要因としてIQの高さではなく，プログラムの中で得られる数値化が困難な力，つまりは非認知能力の獲得・向上にあると気づきました。ちなみに，ヘックマンは経済学者ですから，最終的にはペリー就学前プログラムによって納税者人口は増え，刑務所等の費用は減るという経済効果の有効性に言及したのです。

14　さて，ヘックマンによって提唱された非認知能力は，その後アメリカだけでなく多くの先進国で注目を集めることとなりました。もちろん我が国も例外ではありません。非認知能力または「非認知的能力」という言葉で重要性が理解され，次第に保育や教育の分野に浸透してきたのです。認知しにくい力，すなわち試験のような機会を設けて点数化・数値化することが困難な力です。例えば，他者とコミュニケーションをとり協調や協働をするための力，自分自身で自らを勇気づけて挑戦や努力をするための力，自分の感情をコントロールして我慢や持続をするための力などのことを意味しています。一方で，点数化・数値化をしやすいIQや知識量，知識の活用力などは認知能力または「認知的能力」と呼ばれています。

15　このように点数化・数値化によって認知しやすいかどうかという「認知⇔非認知」に加えて，もう一つの意味もありま

す。それは，理性的な側面を持つ認知的な能力と理性的というよりもむしろ情動的な側面を持つ非認知的な能力という意味です。後で紹介しますが，情動的な側面を持つ非認知能力として「社会情動的スキル」が提唱されています。このように非認知能力をとらえると，その時々の状況・環境やこれまでの経緯，そして自分自身の内面（感情など）に左右される力，言い換えれば文脈依存的な力（複数の要素が関連・影響する中で発揮される力）といえるでしょう。「非認知」には数値化困難という「非認知」と情動的で文脈依存的な「非認知」という二重の意味があるのです。

⑯　そして，情動的で文脈依存的だからこそ，数値化困難でもあるという関係になっていることがわかります。

（中山芳一『学力テストで測れない非認知能力が子どもを伸ばす』東京書籍　二〇一八年，一部改変）

（大阪教育大学　教育学部　2021）

生徒メモ欄

チャプター2

問題およびヒント

問題を見てみよう

筆者の考える「認知能力」と「非認知能力」の違いについて要約し，児童の「非認知能力」を育てるために小学校の教科指導に求められることについて，あなたの考えを述べなさい（横書き600字以上800字以内）。

解答案をつくってみよう

100

200

300

400

500

600

700

800

（　　　　字）

生徒メモ欄

教員記入欄

自己評価表

答案が完成したら、以下の表を用いて自己評価をしてみましょう。
5段階評価の基準は、巻末のルーブリックを参照してください。

設問の理解	出題の意図および背景の理解	S A B C F
意見（主張）	設問と意見との関係	S A B C F
	独自性・独創性・発展性	S A B C F
理由（根拠）	事実に基づいた論証	S A B C F
	重要性・問題性	S A B C F
論理性・簡潔性	適切な論理展開	S A B C F
	簡潔な記述	S A B C F
表記・表現	誤字・脱字	S A B C F
	段落の設定	S A B C F
	制限字数	S A B C F
	文体の統一	S A B C F
	表現技法	S A B C F

生徒メモ欄

教員記入欄

チャプター3

答案例①

　「認知能力」とは点数に出して測定することが容易な力のことであり、「非認知能力」とは点数に出して測定することが困難な力を指す。前者は国語や算数の問題をどれくらい解けるかで測れるが、後者は他人とのコミュニケーションや、前向きに取り組む意欲などであり、一概に点数化することができないものである。

　「非認知能力」を育てるために、小学校の教科指導で求められることは、「自己肯定感を高めること」だと考える。代表的な例として挙げられている、自分をプラスにとらえる力は、もちろん持って生まれた性格というものもあるだろうが、小さいうちから学ぶことでも身につく。

　例えば、相手を褒め合う時間を作るのが良いと思う。実際に私が小学生の時、道徳の時間に「友達の良いところを発表する」という試みがあった。ゴミ拾いをしてすごいと思った、下級生に親切にしていて偉いと思ったなど、自分では何気なく行ったことを友達に褒められると、とても誇らしい気持ちになり、行動を起こしたことが自信につながっていった。また、友達の良いところを探すことで、自分ならどうしたいか、という他者の立場で物事を考えることができた。そして、あまり自分が褒められないともっと頑張ろうと意欲が湧いてきたことを覚えている。

　褒められて嫌な気持ちになる人はほぼいないだろう。褒めるという行為は歳を重ねるご

とに難しくなると思う。相手の良いところは認められても、言葉として出てこない。しかし、小学生のうちならば、まだ素直に言葉が出てくることが多い。その時に褒める練習をすることで、自己肯定感を高めることができると考える。褒める喜びや褒められる喜びが身についていれば、大人になってもずっと自分をプラスに考えることができるのではないかと思う。

（765字）

生徒メモ欄

教員記入欄

評価してみよう

答案例①を、以下の表を用いて評価してみましょう。
5段階評価の基準は、巻末のルーブリックを参照してください。

設問の理解	出題の意図および背景の理解	S A B C F
意見(主張)	設問と意見との関係	S A B C F
	独自性・独創性・発展性	S A B C F
理由(根拠)	事実に基づいた論証	S A B C F
	重要性・問題性	S A B C F
論理性・簡潔性	適切な論理展開	S A B C F
	簡潔な記述	S A B C F
表記・表現	誤字・脱字	S A B C F
	段落の設定	S A B C F
	制限字数	S A B C F
	文体の統一	S A B C F
	表現技法	S A B C F

生徒メモ欄

教員記入欄

チャプター4

答案例②

　語彙力や計算力はその能力を点数化するためのものさしがはっきりしているため、それがどの程度身についたのかを数値化し、測定することは容易である。このように測りやすい力を「認知能力」と呼ぶ。対して、コミュニケーション力のように他者と自分との関係の中で必要となる力や、他者への思いやりや共感のように社会との関係の中で必要とされるもの、自信や意欲、あるいは忍耐力のような内面から発して自らを高めようとする力などは固定したイメージやものさしがないため、数値化や点数化することは容易ではない。このように測りにくい力を「非認知能力」と呼ぶ。

　この「非認知能力」を育てるために必要なことは漢字や計算を教える時のような画一的な受動的な授業だけではなく、自ら考え、発言し、また他者と協働して結論を導くといったような能動的な姿勢を養う授業だと思う。

　自分がどう感じたかあるいは他人がどう感じたと考えたかを発言することは以前から特に道徳の授業で行われているが、「非認知能力」の重要性が理解された現在ではあらゆる教科において、この能力を鍛える機会を豊富に準備する必要があるだろう。国語を例に挙げると、ディベートやお互いをインタビューする機会を設けることで、自らの意見を整理し他者に伝えることや多様な意見を受容することの重要性を学ぶことができる。比較的「認知能力」の高低で成績が出てしまいがち

な主要教科に関しては、その能力の定着と並行して、このようなグループワークや、自分を客観視できるよう自分に関して分析するといった指導が求められると思う。挑戦や努力を続けることや、失敗したときに気持ちを切り替えることと、不本意な状況で我慢をすること、これらの力を伸ばしていくことは、個人では限界があるため小学校という社会の中であらゆる場面を用いて指導していく必要がある。

(782字)

生徒メモ欄

教員記入欄

評価してみよう

答案例②を、以下の表を用いて評価してみましょう。
5段階評価の基準は、巻末のルーブリックを参照してください。

設問の理解	出題の意図および背景の理解	S A B C F
意見(主張)	設問と意見との関係	S A B C F
	独自性・独創性・発展性	S A B C F
理由(根拠)	事実に基づいた論証	S A B C F
	重要性・問題性	S A B C F
論理性・簡潔性	適切な論理展開	S A B C F
	簡潔な記述	S A B C F
表記・表現	誤字・脱字	S A B C F
	段落の設定	S A B C F
	制限字数	S A B C F
	文体の統一	S A B C F
	表現技法	S A B C F

生徒メモ欄

教員記入欄

チャプター5

レベルアップのための読書案内

本講で学んだことを元に、さらにブラッシュアップするための
おすすめの書籍情報を知り、その書籍の読み方を学びましょう。

講義メモ欄

生徒メモ欄

教員記入欄